

ラジオ放送  
〈平成30年4～6月放送分〉

ON AIR



金光教の声

No.423



## もくじ ~ contents

### <こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちよつといい話

- ことだま page 1
- 不思議な力の源 page 5
- 娘と旅と感謝の心 page 9
- こわれた自転車 page 13

### <先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です

- 十歩でも百歩でもなく、一步前進  
石川県・尾山教会 久田博泰 page 17
- 台風  
三重県・上野教会 近藤栄一 page 21
- 三日坊主(信心ライブ) page 25
- キャンプのともしび  
山口県・下関北教会 宮野泰 page 30
- 拓ちゃんの笑顔  
福岡県・小郡教会 的場道正 page 35

### <昔むかし>

☞ 金光教的むかしばなし

- この道通るべからず page 40
- 障子と敷居 page 44
- <sup>しゅてんどうじ</sup>酒呑童子の酒飲み大会 page 48
- 大川の渡し船 page 52

《こころの散歩道》

「ごとだま」

いやゝ、言葉というのは不思議なものです。

今日は僕の体験の中から、そんな話をします。

あるお葬式の日のことです。6月ごろでした。

始まる30分前に会場に着きました。しばらくすると隣に、「暑い暑い」と言いながら座つてきた男性がいました。隣の人とのスペースは狭く、その男性が、「暑い暑い」と言つて扇子せんすをバタ

バタさせる度、その人のひじと僕のひじとが当たったり、かすつたりするのです。落ち着かないなゝと思いましたが、何より不快に感じたのが、「あゝ暑い暑い！」と連呼されることでし

た。何べんもそれを聞くと、「こちらまで暑くなる！ 言い過ぎだよ！」と思いました。確かに蒸し暑い日だったかもしれませぬ。しかし、私とすれば、せつかく早めに来て静かに故人をしのびたかつたのに、気が散つて、穏やかな気分じゃなくなつてしまいました。

また別の日のことです。朝、会社に向かつて歩いていけると、自転車に乗った女性が私を追い越していきました。そして、そのままのスピードで大通りに出た瞬間、右側から車が…。

「あつ危ない！」。車も自転車も急ブレーキをかけた、その時です。運転していた男性が窓を開けて、「危ないなゝ、オバハン！」と、にらみ付けながら大声で叫び、その場を走り去り

ました。

女性はビックリした顔をしましたが、黙ってまた自転車をこいでいきました。目の前でそれを見ていた私は、事故がなくて良かったと思うと同時に、「危ないな、オバハン」という言葉が耳に残ってしまいました。何という朝だ！あの女性も嫌な思いをしただろうなあと、私まで不愉快な思いになりました。

朝の通勤電車の中。僕の座っていた座席の横に、少しばかりスペースが空いていました。そこに60歳くらいの女性が、足早に近付いてきたかと思うと、くると向き直り、大きなお尻をぐいぐい押し込んできました。私はびっくりすると同時に、窮屈さだけではない、何か不愉快

なものを感じました。

そしてその日の帰りの電車。また私の横にスペースが少し空いて、そこに年配の女性が座ろうとしました。女性はその瞬間、「どうもすみません。狭い思いをさせますな」と頭を下げて言われました。朝の時とは違い、「どーぞどーぞ」と、自分が狭くなっても全然大丈夫という思いになりました。言葉によっても違うものでしょうか。

妻のお母さんの話をします。お母さんは15年前の69歳の時、突然、くも膜下出血を起こし、手術で幸い命を取り留めましたが、意識の無い状態が2年続きました。一人娘の妻は、毎日のように病院に通って、お母さんの看病をしてい

ました。

妻は、「絶対に治る」と信じていました。「いつ目が開くのか分からないけれど、お母さんの意識がちゃんと戻った時、手足が固まっていたらお箸も持てず、可哀想だ」。こういう妻の思

いから、手足をいつもマッサージしてあげていました。なかなか目が開かなかったのですが、妻は、「耳だけは聞こえていると思う」と、お母さんの好きだった音楽のCDを掛けたり、お母さんが演奏していた八雲琴という、2本糸のお琴の音楽を聞かせてあげていました。眠り続けるお母さんに声を掛けることも続けました。

「お母さん起きて！」

信じる気持ちを通じたのでしょいか。お母さんの目が段々と開くようになり、そのうち笑顔

も出るようになりました。声を出す力がなかったのですが、妻は積極的に言語のリハビリにお母さんを連れ出し、少しずつ少しずつではあるのですが、声も出てきました。

治る見込みがないと言われたお母さんが、日  
々リハビリを続けた結果、3年半経って、自分の手で口から食事を取れるようになりました。ずっと寝た切りでしたが、お母さん自身がトイレに行きたいと言い出し、3人掛かりでトイレ介助をしてもらいました。それが、足の筋力が付いてくると、2人介助に減り、そのうち1人の介助になりました。その頃から在宅生活となりました。その後も、お母さんの努力によって、車椅子を自分で動かして、ポータブルトイレに移れるまでになりました。

奇跡が起きたように感動しましたが、僕がとても心に残っているのは、お母さんがいつも、どんな時でも、「はい。ありがとうございます、ありがとうございます」と言い続けていることです。「何に対して言っているんですか」と、一度聞いたことがあります。お母さんは脳の状態も決して元通りではないのですが、「そうやなく何かありがたくなってくるのよ」と、ほわ〜とした感じで言いました。何かしら、お母さんの周りには静かで落ち着いた空気が漂っているのを感じ、ふっと癒やされるような気持ちになるのです。

言葉の持つ不思議な力…。マイナスにもプラスにも働きます。普段、何気なく使っている私

の言葉は、周りの人にどんな作用を及ぼしているでしょう。人を和ませたり、元気付けたりできますように。そんな願いを込めながら、今日一日、言葉を大切に使いたいと思います。



## 「不思議な力の源」

えっちゃんは、小学校1年生の女の子。えっちゃんには、毎日、楽しみにしていることがありました。

「ねえねえ、お母さん。今日は一体どんなお話をしてくれるの？」

「そうねえ。えっちゃんが好きな、犬が出てくるお話をしようか。むか～しむかし、あるところに1匹の可愛らしい犬がおりました…」

こうやって、夜になるとえっちゃんは、お母さんと一緒にお布団に入って、お話をしてもらいながら眠ります。犬が出てきたかと思えば、

おじいさんやおばあさんが出てきたり、途中までは桃太郎のお話だと思っていたら、終わりは全く違うお話になっていたり。お話はどれも、お母さんのオリジナル。毎回、どんなお話になるのか、えっちゃんには想像も付きません。けれども、結局いつもハッピーエンドになるお話が、えっちゃんは大好きで、一日の終わりの楽しみだったのです。

だけど、たまにちよつと困ってしまう時もありました。

それは、お母さんの方がえっちゃんよりも先に眠ってしまった時です。お母さんの話し方がどんどんとゆっくりになっていって、すこ～しずつ途切れ途切れになっていって、気が付けば、スースーと寝息を立てて、お母さんは眠ってし



まっていますのです。

えっちゃんは続きが気になって、お母さんを起こそうするのですが、疲れているからか、一向に起きてはくれません。えっちゃんは、「もうっ！ お母さんってば！ 明日、続きから話してよ！」と頬を膨らませながらも諦めるしかないのです。

でも、そうやって途中で寝てしまっても、お母さんの片手はえっちゃんの頭の上。

お話をしてくれながら、頭を優しくなでてくれていたお母さんの手がとても温かくて、えっちゃんは幸せな気持ちで眠るのでした。

えっちゃんは大学を卒業し、地元の会社に就職。車で通うようになりました。車は家から歩

いて30秒の所にある駐車場に停めています。

「お父さん、今日はもう見送りしなくても大丈夫だよ！ 朝、いつも忙しいでしょ？」

「いやいや、父さんはこうやって、えっちゃんの元気な顔を見て送り出すのが楽しみなんだよ。さ、今日も元気にいつてらっしゃい！」

「なんか照れくさいなあ。まあいいや、いつてきまーす！」

お母さんの夜のお話はもうなくなったけれど、今度は毎朝、お父さんが駐車場まで付いてきてくれて、「いつてらっしゃい」と、笑顔で手を振って送り出してくれることが、日課になっています。

ある時、仕事がうまくいかず、出勤するのがとても憂鬱ゆううつな日がありました。朝ご飯を食べて

いても、支度をしていても、えっちゃんはずつとしかめっ面のまま。けれど、そんな時でも相変わらず、お父さんはいつもの笑顔で、「いつてらっしゃい」と手を振ってくれます。えっちゃんもつい、いつもの条件反射で、「いつてきます！」と笑顔で手を振り返していました。すると、その瞬間に今までの憂鬱な気持ちはどこかへ飛んでいってしまったのです。

「あれ？ さっきまであんなにグダグダと悩んでたのは何だったんだろう…」

どうやら、お父さんの笑顔と「いつてらっしゃい」の言葉には、とても不思議な力があるようです。

さらに仕事が休みのある日、えっちゃんはお

母さんとこんな話をしていました。

「お母さん、私ね、小さい頃、お父さんとお母さんってすごく仲良しだと思っていたし、自分の家に問題なんて全く無いって思ってた。だけど、一度だけ、家計が厳しいって2人が言い合ってるのを盗み聞きしたことがあってね」

「ああ、あの時のこと？ えっちゃん、半泣きでいきなり台所に入ってきたよね。『この50円、私の全財産！ これだけしか無いけど家のために使って！』って言いながら。あれはびっくりしたよ」

「お母さん、覚えてくれてたんだね。あの時はお金で困ってるなんて話も、2人が言い合ってることも、一度も聞いたことがなかったから、ものすごくショックだったんだよ！ でも、い

ざ自分が大人になってみると、お父さんもお母さんも普通によくけんかもしてるし、家計の話もしてるよね。子どもの頃、全然気付かなかつたのが不思議だよ」

「そらあ、えっちゃんが気付かなくて当たり前。『子どもの前では絶対にけんかをしてはいけない』ってお父さんと約束してたんだから」

「ええ！ そんな約束してたの!? 初めて知ったよ！」

子どもの頃から家のことは何も心配せず、安心して育ててきたえっちゃん。親がそのためにとても努力をしてくれていたことに、この時初めて気が付いたのでした。

思い返してみれば、夜のお話にも、毎朝の見

送りに、そこには、子どものことを大切に思う親心がたっぷりと含まれています。

「子どもを喜ばせてやりたい」「安心して毎日を過ごしてもらいたい」。そんな親心が、自分を元気にしてくれる不思議な力の源だったのだと、えっちゃんは思うのでした。



## 「娘と旅と感謝の心」

今から2年程前のことだ。中学生だった娘が、「トライやるウィーク」という職業体験の授業で、近くの幼稚園へお手伝いに行くことになった。

3歳ごろには、母親の真似をして、幾つものバッグを腕に掛け、背中にはお人形をおんぶ。おもちゃのベビーカーを押して、家中を忙しく動き回っていた娘が、幼稚園で小さい子のお世話をするとは…。月日が経つのは早いものだ。さて、その最終日。職業体験の期間を無事に終え、幼稚園から帰ってきた娘は、その日の出

来事を、私に話して聞かせてくれた。

「幼稚園のお庭で子どもと遊んでいたら、女の子が1人、『お姉ちゃん、ありがとう。これ、プレゼント』って、木の葉っぱを渡してくれてん。『ありがとう〜』って受け取ったら、他の子たちも真似をして、葉っぱとか、石ころとかを、次々と渡してくれるねんぞ！」とうれしそうだ。私も、娘の笑顔に触れて幸せな気分になった。

「なあ、子どもたちからもらったプレゼントを見せてよ」と頼んだら、娘は、「もう無いよ」と素っ気ない。聞けば、子どもたちが次々に持ってきてくれるプレゼントの扱いに困って、こっそり手を自分の体の後ろに回して、もらった先から次々と、園庭の土の上にそっと戻してお

いたというではないか。

思わず、「大事にしてあげんと…」と言いつけられたら、「ありがとうの心は、ちゃんと受け取ってるで」と、私の言葉を遮るように、娘の答えが返ってきた。

「心はちゃんと受け取っている」か…。私は、その言葉の響きに、何か大切なものが隠れているような気がして、思いを巡らせた。

「心を受け取る」と聞いてよみがえった旅の記憶がある。真っ白なサンゴが敷き詰められた通りに沿って、赤い屋根の伝統的な民家が建ち並ぶ美しい集落。沖縄県は八重山諸島、人口300人あまりの竹富島を、1人でふらりと訪れた時のことである。

旅の前夜、偶然つけたテレビの番組で、この島が取り上げられていた。御嶽うたきという神聖な場所を守りながら島で暮らし、祈祷きとなどの儀式をつかさどる巫女みこさんが取材を受けていた。この巫女さんは、島の神様やご先祖たち、そして、次々とやって来る大勢の観光客への感謝の気持ちを込めながら、毎朝、あの白いサンゴの道を、奇麗に奇麗に掃き清めているという。掃き清めることで、暮らしの場が清らかなものになり、また自らの心も整えられるのだと、その話を話していた。

そんな思い掛けない形で旅先の予習をした私は、翌日、予定通り島に渡り、水牛に引かれた車に乗って、美しい集落を巡る観光ツアーに参

加した。ツアーの途中、「ここが、大切に祈り継がれてきた神聖な御嶽です」と説明されたその場所、私は私なりに祈りを込めた。

祈りを込めたのは、この島の人たちが、島を愛し、守りながら脈々と世代を重ねて生きてきたという事実と、人々の暮らしを成り立たせ続けてきた天地の営々とした働きに感謝しないではいられない気持ちにならされたからなのだ。

「素敵なのこの島に、よそ者の私が、押し掛けようにしてお邪魔しています。素晴らしいこの場所に来させていたいただいてありがとうございます」と、ごあいさつせずにはいられなかった。

星の形をした砂で出来ているというビーチ、南国の花々が心地良さそうに風に揺れる集落

：。すっかり癒された私は、帰りの船の時間を気にしつつ、汗をかきかき、お土産を買いに急いだ。地元の人に教えてもらったサーターアンダギーがうまいという店だ。4畳半ほどの小さなその店は、数組の先客が居て、混んでいた。

大急ぎでお目当ての揚げ菓子を買った私は、支払いの時、店のおばあさんに、この島のおかげで今とても幸せな気持ちになっていること。島で暮らす皆さんが素敵に暮らしを守ってこられたことへの敬意とお礼。そして、生活の場でもあるのに、私のようなよそ者を大らかに迎え入れてくださったことへの感謝を言葉にして伝えた。

おばあさんは、商品を手際良く袋に入れると、「おばあからのお土産だよ」と言って、ここ

つと笑い、キンキンに冷えたペットボトル入りのお茶を特別に添えてくれたのだった。

「私の『ありがとう』という思いは、あのおばあさんを通して、島が受け取ってくれた…」。

私は、そんな幸せを感じつつ、高速船に揺られながら遠ざかる島影をいつまでも眺めていた。

ありがとうという感謝の心。大切だとは分かっている、普段は気恥ずかしさもあって、つい言いそびれることが多いなあと思う。

ありがとうの心を送り、ありがとうの心を受け止める。そんな「ありがとう」のやり取りが広がる場所は、あの南の島のように、幸せな人を増やしていくに違いない。

「私たちが暮らすこの街も、そんな素敵な場

所にしたいね」と、いい子に育ててくれた感謝の気持ちを込めながら、高校生になった娘に、照れくさいけど、話してみようかなあ。

ありがとう!

《こころの散歩道》

「こわれた自転車」

僕の家には、11年前、小学2年生の時に乗っていた子ども用の自転車があります。

その小さな自転車の前輪は、交通事故でS字にぐにやりと曲がっていて乗ることができませんが、あの日のことを忘れないために大切に残してあります。

小学3年生になる前の春休みのことです。

僕の学校では、3年生になると、自転車の乗り方、マナーの実習があります。それまでは保護者と一緒でないと自転車に乗ることが禁止さ

れています。両親からも、「お父さんかお母さんが一緒じゃないと絶対に道で乗っちゃ駄目だよ」と言われていました。でも、家の中で遊ぶのが退屈になって、まだ3年生になったわけではないけれど、2年生は終わったし、お兄ちゃんと一緒だったらいいかと思い、自転車で兄と近くの公園に出掛けました。

公園にはいつも誰かが遊びに来ています。この日も友達がいたので一緒に楽しく遊んでいると、あつという間に夕方になり、帰る時間になりました。

家に帰る途中、上り坂を横切る所があります。いつも車が来ていないか、注意しながら通る危険な所です。

手前で自転車を降りて、押しながら横断して



いました。すると、そこへ大きな車が勢いよく上ってきたのです。僕はとっさのことで前に進むことも後ろに下がることもできずに立ち止まってしまいました。

ガシャーン。車は自転車の前輪にぶつかり、僕もそのまま5メートルぐらい引きずられてしまいました。何とか起き上がると、車を運転していた人が降りてきて、「大丈夫？」と声を掛けてくれましたが、僕が、「大丈夫」と答えると、そのまま走り去っていきました。

実は自転車が引きずられた時に足も下敷きになっただけで、本当は大丈夫ではなかったのに、「自転車で乗っていたことが、ばれたら怒られる。どうしよう」という気持ちでいっぱいでした。今思うと、内緒にできるはずもないのに、

「何とか親に知られないようにしなくては……」と兄と作戦会議をしました。

壊れていない兄の自転車を僕が押して、兄が僕の壊れた自転車を抱えて帰り、すぐに雨よけのカバーを掛けて見えないようにしました。

何もなかったかのように家の中に入り、自分の部屋に入った時には、ほっとしたのか、涙が出てきました。でも、さすがは母です。何となくいつもと様子が違うと感じたのか、母は兄に事情を聞いたようです。びっくりした母は、それからすぐに部屋に来て、泣いている僕を、「怖かったね」と抱きしめてくれました。

それから、母と自転車を持って警察署に行きました。初めて入った警察署の中で、ぶつかっ

た時のことや車のことなど、色々なことを聞かれましたが、テレビドラマのようで、ドキドキしました。事故の現場にも行き、家に帰った時には、夜になっていました。

仕事から帰って来た父に、全てを話しました。

すると父は、「神様に、大事に至らなかったお礼を言おう」と言って、一緒に神様に手を合わせました。「ルールを守らなかったから事故に遭ったんだ」と怒られると思っていたので、「お礼を言うって、どういうこと？」とびっくりしました。

父は、「お前たちが取った行動は良くないことだったけれど、毎日、お前たちの安全と成長を願ってくれているおじいちゃんやおばあちゃん、お父さん、お母さん、そしてたくさんの人

の祈りのおかげで、神様がこのくらいの事故で済ませてくださったんだよ。神様が守ってくれたんだよ。自転車はぐにやぐにやになったけど、身代わりになってくれたんだね」と話してくれました。

確かに警察の人は、曲がった自転車を見て、「こんなに引きずられたのに、足の骨が折れていないのが不思議だ」と言っていました。

小さい時から、朝起きた時と、幼稚園、学校の行き帰りには必ず神様にお参りをしていたで、守ってもらっているというとは何となく理解していたのですが、たくさんの人に祈られているということには気が付いていませんでした。

小さい時からおもちゃの車を動かして遊ぶことが好きだった僕は、高校を卒業した後、車の免許を取り、今、車の整備士になる勉強をしています。

ドライバーのミスによる事故も多いけど、整備のミスによる事故もあります。これから先、僕は人の車を扱う立場になります。しっかりと技術を学んで、身に付けていきたいと頑張っています。

車は生活する上で便利で必要なものですが、事故が起これると悲しみや苦しみが生まれます。僕が事故に遭った後、しばらくは、みんなが体のことをとても心配してくれました。

そのことをずっと心の中に置いておくためにも、壊れた自転車は残しています。これから整

備士として一緒に働く人や、周りの人たちが笑顔で過ごせるよう、祈らせてもらいたいと思っています。



《先生のおはなし》

## 「十歩でも百歩でもなく、一歩前進」

石川県・尾山教会 久田博泰

私は、ごく普通の両親の間に長女として生まれました。

「性同一性障害」、別の呼び方では「G I D」とも呼ばれます。ドラマなどで取り上げられることが多くなりましたが、私はその当事者です。つまり、心の性別と体の性別が違うのです。不便なこと、困ったこともあります。私は今、男性として楽しく生活しています。

よく人から問い掛けられる質問があります。

それは、「いつからそうなったの？」という問い掛けです。「小さい頃からでしょうか？」と問われると、少し口ごもってしまいます。

幼い頃の私は、「男の子はこう、女の子はこう」と明確な線引きをしていなかったように、素直に両親から与えられたスカートをはき、あたる日は木登りをしたり、またある日は家の中でおもちゃを使っておままごとをしたりと、自由に遊んでいました。

「いつから」の完全なボーダーラインを引いたのは、きつと遅い方で、成人を迎えてから女子寮に入る機会があり、その頃、気持ちが大きく変わったのをしっかりと記憶しています。

「女子寮」という良くも悪くも「女性とは違うあるべき」という狭い選択肢しか用意されて

いない環境で生活したことで、今までは「女性らしさ」「男性らしさ」関係なく、ふわふわと好きなものを好きなだけ選んでいた自分自身を見詰め直す機会を得ることができました。

当時、自分の性について悩み、またどんなふうにも人と接して良いのか分からずに、延々と自分の頭の中だけで考え、「人と違う」という事実にはひどい孤独感と悲しみを感じ、とても苦しんでいました。

「自分の頭の中は、男なのか女なのか」という疑問を人に話す勇氣もなく、理解してもらえらるると思えずに疲れ果ててしまっていた、まさにその時、女子寮で同室だった女性から、ある金光教の先生を紹介されました。

初めて出会った日、先生は、緊張していた私

を、にこにここと明るい笑顔で迎えてくれました。少しずつ話す私の言葉を遮ることなく、「大変だったね」と時折相づちを打って、どれだけ時間が掛かったか分かりませんが、私が話し終えてスッキリするのを待ってから、「金光教の先生の中でも同じように性に悩んでいる人がいるよ」ということを教えてくれました。

その言葉を聞いた瞬間、孤独に曇っていた心が一気に晴れていったのは、今でもはっきりと覚えています。自分だけではない、その安心感がすんと心の奥底までしっかりと届きました。「それは気の迷いだ」とか、「もつとよく考えてみたらどうだ」など、お説教をされると恐れていた私の心配も、全てくみ取ってもらったような、何とも居心地の良いものでした。

それまでの私は、堂々巡りになってしまい、  
答えの出ない頭の中、孤独感と説明の付かない  
空しさに、生きることも全て投げ出す覚悟を選  
択せざるを得ない状況にあったのですが、今で  
は良い経験だったと穏やかな気持ちです。

それまでみじんも信心などしてこなかった私  
ですが、その時ばかりは、もし女子寮に入る期  
間がずれて同室の女性と出会っていなかったら  
…、伝えることを恐れて先生と会う決断をしな  
いままだったら…、些細ささいなこと一つでも欠けて  
いたら時節を逃していただろうと思い、神様と  
のご縁を信じる大きな切っ掛けになりました。

人に話してみようという、ほんのひとつまみ  
ほどの勇氣と、遮ることなく話を聞いて受け止  
めてくれる聞き手の存在。その2つを、金光教

の教会という場所で手に入れることができたお  
かげで、今こうして新しい選択肢を得て、新し  
い道を歩んでいます。

新しい道を得た私でしたが、戸惑いも多くあ  
りました。20年近く女性として生活していた基  
礎を全て変えて男性として生活する、それは心  
が躍るほどにわくわくと楽しみな半面、家族が  
与えてくれたものを全て否定するようなひどく  
寂しい気持ちもありました。

私は、「性別適合治療」といって、心の性に  
体の性を合わせていく、という治療を行って  
います。

今、定期的に男性ホルモンを注射しています。  
効果は人それぞれですが、私の女性として機能  
していた体の働きはストゥップし、声が変わり、

筋肉が発達し、体毛が濃くなり、ヒゲが生えるなど、夢のような変化を楽しみながら、更年期障害に似た副作用も感じています。

変わろうと決意したその日から、治療で何かしらの悪い影響を受けるであろう自分の体や命のこと、家族を裏切っているのではないかという終わらない葛藤、様々な覚悟が必要でした。

その反面、色々と珍しい経験もしました。初めて使用した男子トイレではひどく緊張しました。名前の変更で家庭裁判所に書類を提出する時は、私のような理由で氏名を変更する方のための記述が用意されていて驚きました。

人と違うということは孤独を感じることもありますが、勇気を出してのぞいてみた世界はとて開かれていて、耳を傾けてくれる人が多く

いることに気付かされました。

そう遠くない過去に、何もかもを諦めていた私は今、その原因を作った「中身と外見の不一致」というアクシデントのおかげで、他人より面白い人生を歩んでいると胸を張って言うことができています。

その切っ掛けは小さな1歩でした。10歩も100歩も先を目指さず、1歩ずつ、小さな勇気を与えてくれた教会という場所と人々に感謝の気持ち忘れず、私はこれからも1歩ずつ前進し続けていこうと思います。

《先生のおはなし》

## 「台風」

三重県・上野教会 近藤栄一

私の住む三重県伊賀市は、四方を山に囲まれた自然豊かな城下町です。俳聖・松尾芭蕉生誕

の地、また近年は忍者ブームで、伊賀流忍者の里として、外国人観光客もたくさん訪れます。

さらに、秋祭りのだんじり行事が一昨年、ユネスコ無形文化遺産に登録され、「文化薫る歴史のまち」として、町を挙げて観光に力を入れています。

さて、私には、娘と息子の2人の子供もがいます。今は、社会人としてそれぞれの道を歩ん

でいますが、その子どもたちが小学生の時のことです。伊賀は、大きな災害の少ない町ですが、非常に勢力の強い大きな台風が来たことがありました。その日は、朝から警報が発令され、子どもたちの学校も休みとなり、自宅で過ごしていました。正午を過ぎた頃から、雨も風も強くなってきました。

子どもたちと、「台風がひどくなってきたな」と話しながら、廊下で外を眺めていると、近所の家の瓦が飛び始めました。さらには、倉庫のトタン屋根も風と共に吹き上げられ、空へと舞い上がりました。後でニュースで知ったことですが、最大瞬間風速は57メートルを超えていたそうです。近隣の店の看板は飛ばされ、街路樹は折れ、町の広い範囲にわたって停電が起きま



した。電話も通じにくくなり、私が経験した中では、一番大きな台風であったように思います。

私の家は、屋根の銅板がめくれ上がったたり、雨漏りがしたくらいで、大きな被害はありませんでした。しかし、子どもたちを始め家族みんなが、不安な一時を過ごした台風でした。夕方、その台風は過ぎ去っていきましたが、停電は続いていました。

その日は、子どもたちが毎週楽しみにしているアニメのテレビ番組がある日でした。「お父さん、停電でテレビ見られへん。おもしろない。つまらへん。何でこんな台風来るんや」と、ぶつぶつ文句を言い出しました。私は子どもたちに、「あんたらだけやないで。どこの家も停電や。早く電気が来るよう、神様をお願いせなあ

かな。すぐ元に戻るわ」と言い、妻には、「明るいうちにご飯の用意をして、早めに夕飯を頂こう」と言って、電気の復旧を祈りました。

夕食の時間になっても停電のままだったので、ろうそくを探し出し、その明かりで夕食を食べ始めました。しばらくすると電気がつき、いつものように明るい食卓になりました。すると、私の母が、自分が体験した戦争の頃の話を始めました。

「今はスイッチ一つで当たり前のように電気がついて、明るい中で何でも出来るけれど、当時は、灯火管制といって、明かりが外に漏れないよう、電球の傘に黒い布を掛けて、その中でご飯を食べたり、勉強したりしたんやで。停電もしょっちゅうあったなあ。あんたらはええ時

代に生まれたんやで。終戦の日、灯火管制がなくなつて、明るい電気の下でご飯を食べた時のうれしさは、何とも言えへんだな。戦争は絶対あかん」と、平和な世の中、便利になつた今の時代に感謝しながら話をしてくれました。母は、当時大阪に住んでいたので、度重なる空襲で自由に電気も使えなかつたのです。父も、戦争のことを思い出したのか、うなずきながら、実家は空襲で丸焼けになつたと話してくれました。

子どもたちは、「ふーん」と言つて聞いていました。私がその時、「今日はこうやつて、少し不自由な思いはしたけど、ええ経験やつたな。この停電の間にも、電力会社の人たちは、電気の復旧のために一生懸命力を尽くしてくれ

ているんや。文句ばかり言つてないで、感謝せなあかん」と思いました。そして、子どもたちに、「ご飯を食べ終わつたら、お父さんと一緒に電気の人にお礼の電話をしよう」と言い、妻も、「それはええな」と言つてくれました。

夕食が終わり、早速子どもたちと電力会社に電話を掛けました。忙しい中、迷惑かと思いましたが、何回か掛けてやつとつながりました。

「電気の復旧を子どもたちがお礼したいと言つていますので、替わります」と、息子に受話器を渡しました。息子は、「おっちゃん、電気つけてくれてありがとう」と言いました。娘にも受話器を渡そうとしましたが、恥ずかしかつたのか、その場から逃げていきました。私も事

情を説明してお礼を言いますと、電力会社の方

な一日でした。

は、「そんなことを言ってもらったのは初めてです。苦情の電話ばかりで、その対応に追われていました。こちらこそありがとうございました」。そう言ってくれました。私も、改めてお礼を申し上げたことでした。

金光教の教祖、金光大神は、「信心する者は、山へ行って木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ」と教えています。またそのことを、先の金光教教主は、「『世話になるすべてに礼をいう心』を忘れてはならない」と教えています。

台風という不安で怖い思いをした一日、停電で不自由な思いをした一日でしたが、家族みんなが、感謝の気持ちを持つことができた、貴重



## 《信心ライブ》

### 「三日坊主」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する信心ライブ。

今日は、長崎県、金光教志佐教会長の井上孝喜さんが、平成25年2月、鶴港教会でお話されたものをお聞きいただきます。

日々、教会で奉仕される井上さんの元に、ある日突然、見ず知らずの方から電話が掛かってきました。10代の双子のお子さんを持つ、お母さんからの相談でした。

子どもさんが双子なんですね。双子じゃけど

も、つい去年の10月に少年院を出たばかりかしますね。何したんですか、って聞いたらね、傷害事件って言いましたね。何か犯罪起こして。

「先生、こんなにして、うちの子どもが10月に少年院から出てきます。うちの子どもを預かってもらえませんかしょうか」っていう電話なんです。

そういう子どもがね、家庭に来ると、まあ、いろいろ差し障りがあると言いましょうかね。そういう子には、仲間、グループがありましてね。そういう人がみんな来ると。「そういう人と一緒にになったら困りますから、教会で預かってもらえんじやろうか」というのが初めての電話でした。

顔も見ただこともないんですけどね、「ああそ

うですか、はいはい分かりました」って。「先生、まあいつペンお参りしますから」と言うてそれから1カ月くらい経って、お参りがあつたんですね。お母さんとお姉さんと2人でお参りがありませんでした。

その時の話はですね、「先生、ああいうことを言いましたけど、私が親ですから、私が育てます。私の子どもですから私が育てます」「そうね、それが一番と思う」って。

近所のそういう不良少年の仲間が色々おりますけどですね。「その子たちも神様の氏子じゃから、その子どもたちが来たら困るんじゃないかって、その子どもたちも一緒に祈ってやらないかんのじゃないの」。そういうふうに話しておりました。

そしたら、「はい、分かりました」と。

「でもね、お母さん、これから子どもさんとどういう生き方をしていくかというのは、お母さんが決めたらいかんよ。それはこれから帰ってね、子どもさんとよく相談してね、親子とも意見が一致したら、もういつペン教会に来てください。もういつペンだけ参って来なさい」と言うて帰ってもらいました。それが11月です。それで、1月になりましたね、「先生長いことご無沙汰しております。子どもたちと話をしましたから、お参りさしてもらいます」という電話があつて、お参りがありました。それが、お母さんとお姉さんですね、子どもさん2人。もう始めはですね、どんな人が来るんじゃないか、とねえ。少年院出てね、はあ、

ドキドキしますけどね。ほんともう普通の子でした。

「どういふふうな話になりましたか？」と聞いたら、「学校に行かしてください。行きたい」と言ってますね。「そうね。何しに学校へ行くん？」。返事がないんですね、「お母さん、何しに学校行かせるん？」。返事がない。子どもさんも黙っとる。

「そうね、それをこれから見付けるために学校行かせてもろたらいいんじゃないの」って。「そうですね」と仰るんですね。

「それを探すために、自分が将来どういう形で生活していくか、を探させていたきたい。そのことを神様にお願ひさしてもらいます。これまで大きくお育ていただいたことのお礼を土

台にしてお願ひをさせてもらいますからね」と。大変喜んでですね、帰っていただきました。

で、子どもさんですね、色々と相談した結果、朝7時に起きて、色々して一日の時間のスケジュールを作ってるんですね。そしてそれが、つい3、4日前、お母さんから電話がありました。

そのお兄ちゃんの方がですね、この頃、朝起きてこない。ちよっとね、疲れたから散歩に行く。行ったら帰って来ん。夜どっか出掛けとる。ねえ、夜中の12時になっても帰って来ん。

夜中に、電話が掛かってきた。「お母さん心配せんでもええよ。友達の所におるから、すぐ今から帰るから」って言うて帰って来ん。帰って来たら、朝の5時ごろ。

もう親はたまらん。で、子どもを責めてるんですね。「あんた、約束を守つたらん。何でそんなことする」。だんだんもう親がね、ノイロ―ゼになって涙声で電話があるんですね。どうしたらいいか分からん。

「はあ、ありがたいねえ」って私は言わせてもらいました。あんた、よう考えてごらん。朝の7時に起きてね、夜の9時か10時か分からんけども、じつところスケジュール通りね、こなすのは難しい。私も出来ん、と。多分誰も出来んと思うよ」って。

お母さんは、「3日間だけ出来ました。それからダメなんです」と言われる。

「三日坊主三日坊主言うけども、3日間出来たから三日坊主やるうがて。3日間出来たことを

何であんた、ありがたいと思わんね」。「はあそうですか」。「ね、ありがたい。そういうふうに元気やからこそ徘徊は徘徊する、その元気なところはありがたいじゃろう」と。徘徊するのは困るけどね。

やっぱり天地に生かされている自分ですね。「子どもが生まれた。うれかったでしょう。しかもね、健康な五体満足の双子じゃった。こげなありがたいことはない。幼稚園に入った、ああうれしいうれしい、小学校に行った、ああうれしいうれしい、と。やっぱりこの、お礼が先なんじゃないですかね」と申しました。大変よく理解していただきましてですね、だんだん元気な声が出るようになりましてですね、電話を切られました。

いかがでしたか。不安や心配にとらわれて狭くなっていたお母さんの心が、先生にお話することを通して徐々に広くなり、その広い心で子どもを受け止めていかれました。

お母さんの明るい気持ちは、徐々にお子さんへも伝わり、今も家族皆で教会へのお参りが続いているそうです。

私たちもつい、出来なかったことばかりにとらわれてしまいますが、出来たことを喜んで、良いところを見い出して、神様をお願いしながら、焦らずゆっくりと歩んでいくことの大切さを感じました。





《先生のおはなし》

## 「キャンプのともしび」

山口県・下関北教会 宮野寿

皆さん、おはようございます。金光教では毎年夏に、中学生向けのキャンプを開催しています。私は縁あって、7年前からスタッフに入れています。私には縁ありますが、今年のキャンプでは特に心を打たれる出来事がありました。

岡山県にある金光教本部の野営場には、全国から14名の中学生が集まってきました。彼らは、8月初めの大変暑い時期に、クーラーも扇風機もない山の中で、3泊4日、汗まみれ、泥まみれになりながら活動をしました。

そのうちの一人、中学1年生のA君のお話をします。彼のことは赤ん坊の頃から知っているのですが、アウトドアが好きというより、どちらかと言えば芸術家肌のおとなしい子です。そして、幼い頃から気になるものをじっと食い入るように観察するような、非常に豊かな感性を持っている。なので、ぜひキャンプを通して、全身で何かを感じ取ってほしいと思い、お父さんに連絡したのでした。

A君は山口県からの唯一の参加者で、一人で新幹線に乗って参加しました。大きなリュックを背負い、不安に押しつぶされそうな表情で、ヨタヨタと歩いてキャンプ場に到着しました。一人の知人もいない上に、キャンプ経験のほとんどない彼が、みんなとうまくやっていける

だろうか。ふと湧き起こった私の心配をよそに、A君はキャンプ初日の午後には、もう、同じ班の仲間とワイワイ楽しそうに活動していました。

キャンプといっても、設備の整った場所で行うレジャーキャンプではありません。キャンプ場は、小高い丘の中腹、池のほとりにあります。設備も、トイレとシャワーと街灯があるのみで、本場に「山の中」といった感じの場所です。

子どもたちはまず、自分たちが寝泊まりするテントを建てること、石を組んでかまどを作ることから始まります。薪を使ってご飯を炊き、水や食料は配給所から自分たちで運びます。水汲み場からテントまでは、かなりの坂があり、いわば、建物の1階から3階まで、炊事の度にポ

リタンクで水を運ぶようなものです。しかも真夏です。大人なら1回の食事で、音を上げるかもしれないません。

しかし、ほとんどが初顔合わせの中学生たちは、次第に打ち解けて準備を進めていきました。なぜなら、声を掛け合って、協力し合わないこと、食事を作ることができないからです。家では蛇口をひねれば、いくらでも出てくる水ですが、ここでは大切に使わないとすぐに空になります。

誰かが空のタンクを持って水をくみに行くこと、その重さを知っているからでしょう、途中で誰かが助けに行きます。

そして、みんなで薪を拾い集め、班長さんは薪の組み方や火の着け方を教えています。手の

空いている子は、ロープを張って物干し場を作ったり、木を組んで、別のかまどを作ったりしています。

初めは頼りなく見えたA君の薪割りをする姿も、だんだん様になっていきました。みんな協力して作り上げた食事を、冗談を言いながらモリモリ食べている姿は、とてもたくましく見えました。

キャンプの最終日、皆の前で参加者一人ひとりが感想を発表します。少し日に焼けたA君は、非常に堂々と、次のように発表しました。

「キャンプに参加して感じたことは、日常生活で当たり前だと思っていたことが無くなる  
と、こんなに苦労するので、『当たり前』はと  
てもありがたいものなのだと思います」

他の参加者の感想にも、「両親や毎日さりげなく支えてくれる人への感謝の気持ちが深まり、水や食べ物や色々な物の大切さに気付きました。普段の生活の中でも、この心を忘れないようにしたいと思います」というものがありましたし、他にも、「自分一人の力ではなく、神様のおかげでここまで生かされていることが分かりました」と言う参加者もいました。

金光教では、「天地のお働き」を「神様」として拝ませてもらっています。ですから、普段から、「食べ物も、水も、天地のお恵みとして大切にしましょう」とか、「お世話になる全てのものに感謝の心をもって生活しましょう」と何度も教えてもらっています。

実は私自身も中学生の頃、このキャンプに参

加し、先ほどのような感想を胸に刻みました。

その頃の記憶は、今も、ともしびのように私の中にあります。ただ、普段の生活の中で実践できているかというと、怪しい場面がありました。

しかし、こうして1年に1度、子どもたちと実際に天地自然の中で一緒にキャンプ生活をする時、あの時、心に刻んだともしびが、再び明るく輝くのを感じます。

蛇口をひねれば水が出る。スイッチをひねれば火が着くこと。誰かがご飯を作ってくることなど、「当たり前」のありがたさを忘れないこと。そして、そもそも、水や燃料や食材が、天地のお働きの中で作り出されて、今、私の目の前にあること。

A君は感想の中でこうも言っていました。

「今回学んだことや感じたことを家でも思い出して、来年はもっと活躍したいと思います」

私は今、A君や子どもたちに負けないように、まずは私自身が、普段の生活の中でも、水や食べ物やお世話になる全てのものに感謝する心を磨いていけるように努めているところです。



《先生のおはなし》

## 「拓ちゃん的笑顔」

福岡県・小郡教会 的場道正

ある日、私がスーパーに行った時のことです。おじいちゃんとお孫さんと思われる2人が一緒にお菓子売り場へと向かっていました。2人も満面の笑みを浮かべながら、とてもうれしそうです。

さあ、この時の2人の心はどんな思いでしょう。おじいちゃんの気持ちは分かるような気がします。可愛いお孫さんと一緒に、それだけでうれしいに違いありません。ではお孫さんはどうでしょう。大好きなおじいちゃんのお出掛

けがうれしい、それともおじいちゃんにお菓子を買ってもらえるからうれしい、もしかすると、ただ単にお菓子を買ってもらえるのがうれしいだけかも知れません。

私の娘がまだ保育園に入る前の頃、こんなことがありました。ある日、自分がもらったお菓子を持って来て、こう言いました。「お父さん、このお菓子あげる」。私はとてもうれしい気持ちになって、「ありがとう」と言おうとした時、娘は続けてこう言いました。「だって、おいしいくないんだもん」。私は思わず笑ってしまいました。

子どもの心というのは、純粹でとても正直なものです。悪く言えば自分中心です。ここから大人になるにつれて、いろんな色に染まってい

きます。では、その大人になった私たちの心は、  
どのように染まっているのでしょうか。

私には、拓ちゃんという息子もいます。拓ち  
ゃんはダウン症で、生まれた翌日に病院の集中  
治療室で診察を受けることになりました。その  
時、「これから先、この子はどうなっていくの  
か」、「親としてどうすればいいのか」、先行き  
の見えない不安がいろいろと頭をよぎっていき  
ました。

しかし、人間はみな等しく神様の子どもであ  
り、「この世に無駄な命は一つもない」という  
思いにすぐになることができました。

それは、私たち夫婦が日々教会で、神様の教  
えを耳にしていたからだと思います。もし私た  
ち夫婦に信心がなかったら、「どうしてこんな

子が」とか、「どうして自分たちに」という思  
いになって、憂鬱ゆううつになり、落ち込んだりしたこ  
とでしょう。

でも、「この子はこれから自分の人生を歩ん  
でいく、それをしっかり見守っていこう」とい  
う思いになることができたのは本当にありがた  
いことでした。

保育園では、自分のことが思うように出来な  
い拓ちゃんに、みんなが気を配り、手助けして  
くれました。拓ちゃんはお友達と関わることで  
色んなことがだんだんと出来るようになりまし  
た。

ある時お友達が、「どうして拓ちゃんはお話  
しすることができないの？」と尋ねてきました。  
そばにいた私は、「君はお話することや、何で

も食べることができたり、走ったり、おもちゃで遊んだりもできてうれしいね」と話しました。普段当たり前に出来ていることが当たり前ではないということ、子どもたちなりに考えているようでした。

拓ちゃんは、小学校3年生まで地域の小学校に通いました。ここでもお友達と一緒にいることで、色々なことが出来るようになりました。クラスで何かぎくしゃくすることがあっても、拓ちゃんがいることでクラスの雰囲気はすぐに和やかになっていくと、先生方がよく話してくださいました。

例えば、けんかをしている子どもがいれば、その中にスツと入っていき、ちよこんと座ってニコニコしている。すると、子どもたちもけん

かをやめてしまうのです。

拓ちゃんは、今、特別支援学校に通う6年生になりました。学校では先生方や支援スタッフの方々、お友達のお世話になっています。お姉ちゃんとも仲良しです。いつも周りを和ませ、私たち家族の気持ちを和らげてくれる大切な存在です。

拓ちゃんは、毎日が楽しいということをもニコニコとすてきな笑顔で表現しています。その笑顔に触れた方は、「毎日苦しいことがあっても、つらい顔ではなく、笑顔で過ごす方がずっと幸せになれることを、拓ちゃんに教えてもらいました」と言ってくれます。拓ちゃんが、人のお役に立っているのです。

私たちはみんな、神様から等しく命を頂いて



います。その命には、それぞれ神様の願いが込められています。障害の有る無いに関わらず、神様から頂いた命をありがたく受け止めて、生き生きとした心でいることが大切だと思うのです。

身の周りのことを不足に思ったり、人を責めたり、あるいは自分を偉く見せようとしたり、時にはダメだと落ち込んだりしてしまうこともあります。そんな時、神様は、「そんな心では幸せになれないよ」、「そんなに苦しまなくていいよ」と優しく手を差し伸べてくださいます。私たちは、障害を抱えている人そうでない人、健康であっても、足の速い人もあれば遅い人、背の高い人もあれば低い人もいます。人それぞれ違う喜びがあり、また悩みがあります。だから

からこそ、みんな支え合っていくことが大切なのです。

お互いどの命も比べることのできない大切な命です。拓ちゃんにしか出来ないことがたくさんあるのです。そこには祈りがあり、願いがあり、いたわりがあり、喜びがあります。粗末にしていい命など、絶対にはないのです。

金光教は、誰もが心安らかに今を生き、命を奪い合うような争いのない世界を願っています。それは神様の切なる願いなのです。

それぞれの個性あふれる命の輝きに目を向けながら、それぞれの心に寄り添い、共に過ごしていきたいと思えます。



《昔むかし》

「この道通るべからず」

昔むかし、ある村に、吾助というおじいさんがおりました。

ある日、吾助が畑を見に行きますと、作物が荒らされておりました。吾助は、「苦勞して育てたのに、誰がこの作物を取ったのだろう」と、プリプリと怒り、家に戻って言いますと、おばあさんは、「それは人が取ったのではなくて、山の獣が食べたんですよ。隣の伊作さんも畑が荒らされたと言っていましたよ」。

それを聞いて頑固な吾助は、「いや違う！」  
と言い、「大体わしの畑の真ん中にある道を、

村のやつらが町に行く近道だと通るから、ついでにもぎ取って行ったのだ」と言い、はたとひざを打って、「そうじゃ、畑の中の道を通れないようにしよう」。

それを聞いたおばあさんは、「町に行くには、山際の小石のごろごろした回り道を通らなければなりませんよ。だからご先祖様が畑の中の道を広げて、村の人たちのために作った近道なんですよ。大体おじいさん、自分の道だなんて思うのは間違ってますよ。お天道様から頂いた皆の道ですよ」。

それを聞いて吾助は更にプリプリと怒り、「この道通るべからず」と紙に書き、立て札を立てました。

それでも気になって見に行きますと、隣の伊

作が町から帰って来ました。それで吾助は、「おい、この立て札が見えんのか?」と言いますと、伊作は、「わしは字が読めんな」と言います。

しばらくすると、今度は村人の権三が通りかかるうとしましたので、また、「おい、権三! この字が読めんのか?」と言いますと、権三は、

「ほおー、これは字か? わしは何の絵かと思うておった」と言つて通り過ぎて行きました。

吾助はすっかりプリプリと怒つてしまい、その畑の道の入り口に柵を作つてしまいました。

さてそれからです。何と家の者も町に行く時には遠回りをしなければなりません。帰つて来た時に吾助が居なければ、柵が開かずに、家に入れないのです。おばあさんが色々と言ひ

ましたが、頑固な吾助が首を縦に振ることはありません。

ある日、孫娘の松が、町に買物に行きました。あまりに帰りが遅いので、おばあさんが心配して戸口に立つておりますと、ややあつて松が荷物を抱え、片手にげたをぶら下げて裸足で帰つてきました。

おばあさんはびっくりして駆け寄り、「お松、どうしたのかい? げたの鼻緒が切れたのかい?」と尋ねますと、松は「いいえ」と言います。「早う早う、取りあえず足を洗うてあげよう」「自分でしますから」と松は言いましたが、おばあさんは急いで水をくみ、松の足を洗つてやりました。

そして、「お松、足にもけがをしているでは

ないか。一体どうしたのじゃ」と聞きますと、松は、「あの山際の道を歩いてる時、石がごろろしているせいかな、げたの歯が欠けてしまいました。するとげたの『痛い痛い』と言う声

が聞こえてきました」。

おばあさんはびっくりして聞きました。「お松は、げたの言葉が分かるのかえ?」「はい、このげたは私のために、こんなに身を減らして働いてくれたのです。だからげたの言葉はよく分かります」と答えました。

そうして、「ですから、げたが可哀想になつて、脱いで裸足で帰って来ました」「お松の足を痛めてまでもかね」 おばあさんが言いますと、「げたが可哀想で、後で奇麗に洗ってやって、おとつつぁんに直してもらいます」「げた

にも、いのちがあるような話じゃね」。

すると、松は、「あら、いつもおばあさんが、どんな物にもいのちがあるから大切にしなさいつて…」「ホホ…、そうじゃった」。

それを、戸の陰からおじいさんがずっと聞いておりました。その翌日です。おじいさんが松を呼びました。「『どうぞお通り下さい』とこの紙にお前の奇麗な字で書いておくれ」と言いましたとさ。

おしまい。



《昔むかし》

「障子と敷居」

昔むかし、ある町に、花という娘がおりました。

花の家は呉服商を営んでおり、気難しい変わり者の父親と母親の3人で暮らしておりました。

ある日、花は町を抜け、峠を越え、隣の村の外れをふらふらと歩いておりますと、粗末な家の前で一人の老人と出会いました。老人は、花を見とがめて声を掛けました。「娘さんや、だいぶ疲れておるようじゃが、ちよつと休んでい

かれんかな」。

花がふと目を上げて見ますと、その老人は白髪はくまゆでおまけに白いあごひげを長く伸ばしており、まるで仙人のように見えました。

「はい」と花は小さな声で答え、老人の持つてきてくれた水を一息に飲み干してしまつたのです。「どうなされた？」と、老人は聞きま

した。花はしばらくためらつておりましたが、「考え事をしながら歩いておりましたら、こんなに遠くまで来てしまいました。どうしたら良いのか分からないのです。あなた様が決めてくださいますか？」「はて…」と老人は言いました。

「私で分かることでしょうか」「はい、私は死んでしまおうか、家出をするか、どちらを選

んだらよろしいのでしょうか？」。

花は真剣に聞きます。

それを聞いて老人は大層驚きました。そして、まず死ぬのは良くないと思い、とっさに、「では、家出をしなさい」と言いました。

すると花は、「ありがとうございます」とお礼を言って、またふらふらと山の方に向かって歩き出しました。

老人はまたまた驚きました。「何とせつかちな娘さんだ」と思い、あの山道には近頃追いきが出るといふ噂を思い出して後を追いつけました。「娘さんちよつとお待ちなさい。やはり家出もいけません」。

すると、花の大きな目から涙がぼろぼろと落ちました。ややあって、「それでは私はどう

したら良いのでしょうか？ あなた様の家に置いてくださいますか？ 家のことは、炊事、洗濯、何でも致します」。

これを聞いて老人は、さらに困ってしまいました。「一体どうなされたのですか？」と聞きますと、「私のおとつあんは、近所の人もあきれくらい口やかましい人で、私やおつかさんに、毎日ガミガミと小言を言っております。

今日も何か気に入らないことがあって、また小言が始まりました。そして終わりに、『お前をそろそろ嫁入りさせねばならん』と言うのです。あの変わり者のおとつあんのことだから、この分だどんな所に行かされるのか…。それで私は家を飛び出してきました」「ほほう…」「嫁入り先のお方がおとつあんのようにガミガミ



と小言を言うお方だと嫌ですから」。

これを聞いて、老人はしばらくの間、あごひげを引つ張りながら考えておりましたが、「あなたの家には障子と敷居があるでしょう」「はい」と答えますと、「それで障子と敷居が合わなくなったら、どうします?」「それは…、どちらかを削ります」。

「それでは今度、敷居を親に例えて、障子は子どもに例えて考えてみましょう。親である敷居を削るよりは、子どもである障子を削る方が早いでしょう。この例えのように、まずは自分が相手に合わせるのです。そうすると互いに円満にいけるということです。どうですか、家に帰ってやってみませんか?」「あのおとつあんにですか!」「どうしても駄目な時は、また

いらっしやい。家出のお手伝いをしましょう」。

それで何とか花は納得して、家に帰りました。それからです、花は毎日のように、「障子と敷居、障子と敷居…」とぶつぶつとつぶやいて家の仕事をしておりました。そうしましたら、父親の小言が少なくなったような気がします。

ある時、「障子と敷居」とつぶやいてる花の様子を父親が聞きとがめて尋ねました。それで、花は老人から聞いた話を父親に伝え、「おとつあんの思いに私の思いを合わせるようにしたの」と言うと、父親は何か心に思ったようで、いつものように小言を言いませんでした。

それから数日後、「お前の嫁入り先を決めてきた」。花は恐る恐る聞きました。「私の嫁入

「り先はどんなお方なのでしょう？」

「それは、隣町の気立ての良い小間物屋の息子  
でした。そうして嫁入り道具に、店一番の美し  
い着物を持たせてくれましたと。」

「おしまい。」



《昔むかし》

## 「酒呑童子の酒飲み大会」

昔むかし、ある山あいの村に、米吉という百姓がおりました。米吉はとても働き者で、夫婦仲良く畑仕事をしておりました。

そのうち、女の子が生まれ、「みつ」と名付け、喜んでおりましたところ、また次々と4人もの子宝に恵まれ、以前にも増して、一生懸命に働いておりました。

あるお正月に、米吉は村の庄屋さんの所にあいさつに行ったところ、幼なじみの平太とばかり出くわしました。

庄屋さんが、「米吉、正月の祝い酒だ。まず一杯」とお酒を勧めますと、米吉は、「いえ、私はさっぱり頂けない口なんです」。

すると平太が、「お前は飲めないんじゃないかと、今まで飲まなかつたんだ。せっかく庄屋様が勧めてくださるんだ。一杯だけでもちようだいでして帰ろうじゃないか」。

そこで米吉は、「それでは一杯だけ」と、お酒を飲み干しますと、ややあつて、「こんなにうまいものは初めてでござえやす」。「そうかそうか」と庄屋様は喜び、そうして米吉は何杯も杯さかずきを空け、平太と良い気分で家に帰りました。

さて、それからです。

今までまじめ一方だった米吉は、すっかり打つて変わって酒飲みになり、平太と連れ立っては酒を飲み、酔い潰れて、平太に背負われて家に帰るようになりました。そういうことが度重なりますと、さすがに平太にも愛想を尽かされ、誘つても断られる。そうしますと米吉は、朝から家でお酒を飲むようになりました。

暮らし向きは段々と苦しくなり、10歳になるみつを始め、弟たちも母親を手伝って畑仕事をしました。「初めに酒を勧めた自分が悪かった」と、平太が時々様子を見がてら、米や麦を届けられます。

ある時みつは、「おっかさん、おとっつあんはお酒がうまいうまいと毎日飲んでいるけれど、体に良いものなの？」と聞きますと、おっ

かさんはとても悲しそうな顔をして、「良いわけないでしょう。そのうちに体を壊してしまいますよ」。

それを聞いて以来、みつは畑仕事の行き帰りに、小さなお地藏様の前で、毎日熱心におとっつあんのために祈りました。

ある日、平太が訪ねて来て、米吉に言いました。「3日後に山一つ向こうの村で、酒呑童子が酒飲み大会をするそうなの。おい米吉どうする？」。

もちろん米吉はそれに飛びつきました。「大酒飲みの酒呑童子かあ。ちょっと怖い気もするが、いくらでも飲めるんだな?」「当たり前だ。でもな米吉、お前、今のようになら酔っ払ってはいけません、これ以上酒は飲めないぞ。それに山を越え

することもできない。これから3日の間は酒を我慢しろ」「なるほど、それはもつともだ」。

信じられないことに、本当に米吉は3日の間お酒を我慢したのです。そして畑仕事にも久しぶりに出ました。でも心の中では、「酒が腹いっぱい飲める」と、そればかり楽しみにしていたのです。

さて、当日平太が迎えに来ました。2人で歩いておられますと、お地藏様の前でみつが何やら熱心に祈っております。何か欲しいものでもあるのかなと、コッソリ近付いて聞いてみると、「おとつつあんがお酒を飲み過ぎて病になりませんよう、どうぞどうぞお守り下さい」。

それを聞いた米吉は、ハツとした顔になり、

そのうち顔が涙でぐしゃぐしゃになりました。

「こんなオレのことをそんなに心配してくれていたんだ」。

そしてくるりと向きを変えると、畑の方に向かって走って行ってしまいました。

みつは、平太に聞きました。「おじさん、酒呑童子って怖い鬼なんでしょう、本当に山一つ向こうに居るの?」「そんなもの、とうに居ないよ」「じゃあ、なぜ?」「おとつつあんの酒は、おみっちゃんたちにとって酒呑童子のような鬼だろう。3日酒をやめて、それに山歩きをしたら酒が抜ける。それで酒と縁が切れるかなあ」と、俺なりに考えて、悪いけどだましたんだ。でもおみっちゃんの、おとつつあんを案じ

る気持ちには負けたよ。ハハ…」。

その日以来、米吉はまじめに働くようになり  
ましたとき。

おしまい。



《昔むかし》

「大川の渡し船」

昔むかし、ある所に、茂平という働き者の若者がおりました。茂平は町から村へ、村から町へと薬を売り歩くあきんどでした。ですから、家を長い間、留守にすることが多かったのです。

さて、その茂平、一仕事終えて自分の村へと一目散に帰ります。なぜかという、茂平の若いおかみさんに、もうすぐ赤子が生まれるからです。留守中のおかみさんの事も、生まれてくる赤子の事も、茂平は心配でなりません。一時も早く家に帰ろうと足取りは速くなります。

夕方、やっと大川の渡し場に着きました。ここ数日、秋の長雨が続いておりましたので、茂平が案じていたように大川の渡しは川止めとなっており、たくさんの人々が船を待つておりました。その時です。「船が出るぞー」と声がありました。やれうれしやと駆け付けた茂平で船は満員になりました。

「やれ助かった」と心の中で神様にお礼を言い、船に足を掛けますと、後ろから袖を引かれました。見ると若い娘です。「どうしなさった？」。

茂平が声を掛けますと、若い娘は泣きそうな顔をして、「申し訳ありませんが、おっかさんが病で死にかけておりますので、私と代わっていただけませんか？」と言います。

さて、と茂平は考えました。「死にかけているこの娘さんの母親と、生まれてくる俺の赤子とどっちが大事だろうか。どっちも大事だが、

生まれてくる赤子は、5人も子育てをした隣のお常さんに、くれぐれも頼んである」と思い、娘に譲ってあげ、今夜の宿を探しに行きました。

やっと宿が見付かり、荷物を下ろしてホッと一息ついた、その時です。何やら慌ただしい気配に、びっくりして外に出ると、川べりは大騒ぎです。茂平が乗るはずだった船が沈んでしまったというのです。

集まった人々が、「大川の水が増して、隠れていた岩に船がぶつかったそうだ」「いや違う。船が出る前に、船頭が止めたにもかかわらず、何人か無理矢理乗り込んで、早く出せと、すぐ

んだそうだ。人が多すぎて沈んだんだ」「いや、あの船頭は船をこぐのが乱暴なんじゃ」などと口々に言っています。

茂平は大層驚き、あの娘さんのことが気に掛かりました。「おつかさんが病なのに、娘さんまで亡くなってしまったのか。何とも気の毒なことだ」と思い、川に向かつて手を合わせました。

さて、次の朝は良い天気で、渡し場には客がぞろぞろと集まってきました。茂平はやっと船に乗り、やれやれと思っておりましたところ、何とあの娘が居るではありませんか。

茂平はパッと顔を輝かせ、「もし娘さん、生きていなさったか。良かった良かった。一体ど



うして？」と尋ねますと、「はい、あの後、船に乗り込みましたところ、駆け付けてきたやぐざ者のような人たちに、いきなり襟首をつかまれて、船から降ろされてしまいました」「しかし、それは命拾いをしましたな。ところでおっ

かさんは、どのような病を患っていないさる？」と茂平が聞きますと、「はい、心の臓の病で」「私は薬の商いをしておりますので……」と言いながら、茂平は荷物の中から薬を取り出し、「あなたに会えたら、おっかさんはどんなに喜びなさるか。銭は要りませんよ」と、遠慮する娘の手に薬を押し付けました。

船が大川の中程に掛かると、揺れが激しくなり、その度に娘は手を合わせ、何事か祈っております。

それをちらちらと見ていた船頭は、その度にゆっくりと艀なべをこぎ直します。娘は道中の皆の無事を祈っているのだと、茂平は気付きました。

さて、茂平は船を降りると、それこそ一目散に我が家に駆け付けました。門口にはお常さんが立っています。茂平は、あわあわと、口も聞けずにいると、「おめでどう、玉のような男子ですよ」とお常さんが言いましたとさ。

おしまい。



**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** w-master@konkokyo.or.jp

# KONKOKYO

<b>ニッポン放送</b>	日曜日	あさ4時30分
<b>東海ラジオ放送</b>	金曜日	あさ5時25分
<b>朝日放送</b>	日曜日	あさ5時30分
<b>RKB毎日放送</b>	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおぼなし

検索

